ジェスチャーの使用頻度に関する実証的研究
——言語の潜在的影響——

瀬 戸 千 尋

An Empirical Study of the Frequency of Gesture Use: Potential Effects of Language

SETO Chihiro

It is generally agreed among communication researchers that ways of communicating, especially those of gesturing, vary from culture to culture. Not only styles and meanings of gestures but also their use frequency is culture-bound in connection with the languages used by communicators. In terms of cultural contexts, the frequency of gesture use increases in low-context cultures, whereas it decreases in high-context cultures. In addition, the languages communicators employ may affect the frequency of their gesturing. In this scholarly context, the present research attempts to prove that the frequency of gesture use is affected not only by cultural contexts but also by communicators' chosen languages. Toward this goal, this research empirically compares the gesture use frequency of Japanese-English bilinguals whose mother tongue is Japanese with that of English-Japanese bilinguals whose first language is English, when they switch their languages. The paper first reviews the literature on communicative gesturing, posing two hypotheses concerned. Second, it introduces the research method employed. Third and finally, the paper indicates research results with a discussion on them.

キーワード: ジェスチャーの頻度、言語、バイリンガル

1. はじめに

ますます増加する異文化間でのコミュニケーションの機会は、その方法の違いに関する研究の重要性を高めてきている。コミュニケーションの方法には、大きく言語的な手段によるものと非言語的な手段によるものがあり、これらの方法の違いは、文化によって異なるという認識がある。特にジェスチャーに関しては、主に文化との関連で研究されている。しかしながら、ジェスチャーは、同時に、言語とも大きな関連性をもっている。そこで、本論文においては、ジェスチャーと言語との関係に視点を当てて研究を試みる。本論文の目的は、使用している言語自体がジェスチャーの使用頻度に影響を与えているということを明らかにすることである。また、ジェスチャーの形態との関連から、今後の外国語教育において重要と思われる点を提示する。

本研究は、最初に、ジェスチャーと文化及び言語との関係について概観し、仮説を設定する。次に、重要且つ必要と思われる概念と調査の方法等を明らかにした上で、調査の結果を報告する。そして、ジェスチャーの使用頻度が異なるのは、文化によってよりも、使用している言語によってより強く影響を受けている可能性があるということを指摘する。

2. 関連する先行研究と仮説の設定

2-1. ジェスチャーに関する先行研究

ジェスチャー研究の多くは、文化との関連で研究されてきた。それは、ジェスチャーの形態と意味付けの仕方は文化によって異なるというものであった(例えば、Knapp, 1972; Birdwhistell, 1973; Morris, Collet, Marsh & O'Shaughnessy, 1976; Kitao & Kitao, 1994)。Barnouw (1973) は、ジェスチャーを「これらの表現や行動は、個人の文化的な背景を表すものである」(217頁、筆者訳) と定義している。また、多くの研究者 (例えば、Ekman & Friesen, 1966; Efron, 1972; Birdwhistell, 1973; メーレイビアン、1986; Wolfgang & Wolofsky, 1991) は、コミュニケーションにおける動作はそれぞれの文化によって学習されるものであることを指摘している。特に、Singelis & Brown (1995) は個人の行動に文化が与える影響を強く主

張している。

同時に、ジェスチャーは言語と密接な関係があることも指摘されている (例えば、LaFrance & Mayo, 1978; 本名、1990; Dodd, 1991; Feyereisen & Lannoy, 1991; McNeill & Pedelty, 1995; Samover & Porter, 1995; Kendon, 1997)。これらの研究においては、ジェスチャーは言語使用の最中に現れるものであり、それは言語を補う機能をもって使用されるということが明らかになっている。つまり、ジェスチャーは口頭で話すことが困難であったり、相手が理解していないと感じたりする場合に、言語表現を強化し、また代替するために使用され、またそのような場合に、ジェスチャーの使用頻度は高くなるのである。この点で、ジェスチャーの使用頻度は言語能力に大きく関係するということができる (Sonia & Stephen, 1997)。また、Ellgring (1997) は、ジェスチャーの使用頻度について、言語活動が活発な程、その使用する頻度は高くなることを指摘している。いずれにしても、ジェスチャーは言語活動に付随して使用されるものであり、その形態や意味付けの仕方は文化によって異なること、またその使用頻度は言語能力や活動の活発さによって影響されるものであるという見解が一般的と言える。

しかしながら、Sonia & Stephen (1997) や小池 (1976) が指摘するように、2 つの異なる言語を話す場合、その人の行動や内面的なものに変化が見られ、また本人もそのように感じているということも確認されている。例えば、日本語と英語のバイリンガル(2 言語話者)において、日本語で話している場合には控えめで物腰も柔らかな女性が、英語で話しだすと非常に積極的に行動し発言するということがあるということである。このことは、使用する言語によってジェスチャーが少なからず影響を受けている可能性を示唆している。

2–2. 仮説の設定

ジェスチャーに関する一般的な見解として、表現方法や意味付与に関しては文化の影響を受け、使用頻度に関しては言語能力や活動の活発さに影響される傾向にあることが明らかになった (Ellgring; 1997)。ここでは、Sonia & Stephen (1997) や小池 (1976) の指摘に基づいて、仮説を設定す

る。彼らの指摘から、ジェスチャーの使用頻度は使用している言語によって影響されるという予測が成立する。

これまでのジェスチャー研究においては、ジェスチャーは言語活動に付随して行われる動作であり、その形態や意味付与に関する研究が主である。また、それらに差異をもたらす要因は文化の違いであることが認識されている。これと同様に、ジェスチャーの使用頻度についても、頻度の違いは言語能力や文化による影響であるという認識が強かった。特に、文化による影響に関しては、Hall (1976) の高コンテキスト文化と低コンテキスト文化という概念によって、コミュニケーション行動の特徴が説明されたことの影響は大きい。ジェスチャーについても、言語に付随して、言語コミュニケーションを補完するという機能的な側面から、高コンテキスト文化ではジェスチャー使用が少なく、低コンテキスト文化では多いという理解がなされている。Barnlund (1975) は日本人とアメリカ人のジェスチャー使用頻度に関して、日本人はアメリカ人に比べ、ジェスチャーが少ないことを指摘している。彼は、日本人は「両手を体の両脇につけて話をする」が、アメリカ人は「ほぼ一言一句に手の動作を使う」(27頁、筆者訳)、と表現している。日本は高コンテキスト文化に属し、アメリカは低コンテキスト文化に属しているからである。

確かに、高コンテキスト文化においては、言語の使用は制限され、コミュニケーションも穏やかなものである。逆に、低コンテキスト文化においては、言語活動を中心にコミュニケーションが行われるため、その活動は顕在的に活発である。しかしながら、逆に高コンテキスト文化に属している国(地域)の言語を使用しているために、ジェスチャーが少なく、低コンテキスト文化の属している国(地域)の言語を使用しているために、ジェスチャーの使用頻度が高くなっているというように考えることもできる。ジェスチャーが、言語活動に伴って行われる動作であれば、このことは至極当然であると言うことができる。

以上のことから、以下の2つの仮説を導き出すことができる。本研究の目的を達成するためには、以下の2つの仮説の両方が支持される必要がある。

仮説 1: 日本語を母語とするバイリンガルは、日本語を話す時よりも英語を話す時の方が、ジェスチャーの使用頻度が高くなり、その差は有意である。

仮説 2: 英語を母語とするバイリンガルは、日本語を話す時よりも英語を話す時の方が、ジェスチャーの使用頻度が高くなり、その差は有意である。

3. 調査方法

3-1. 重要語句の定義

本研究を進めるために、「ジェスチャー」と「バイリンガル」の 2 つの用語を定義しておくことは不可欠である。

ジェスチャーは機能的と範囲的な 2 つの側面によって定義される。*Oxford Encyclopedic English Dictionary* (1991) を初め、多くの研究者 (例えば、Wolfgang & Wolofsky, 1991) は、身体の動きによって感情や意味を伝達すること、例えば指を 2 本立てて示すことによって、「2」という意味を表すなどをジェスチャーの機能であるとし、これが機能面ではほぼ一致した見解であると考えられる。一般的には、ジェスチャーは意図的な動きとして考えられているが、Feyereisen & Lannoy (1991) は、電話中に行うような相手には見えないけれど使ってしまうような無意識的なジェスチャーもあることを指摘している。また、範囲的な側面に関しては、Kendon (1997) のように、ジェスチャーをあらゆる相手に対して向けられた、且つ相手によって認識された可視的な動作とする見解もある。しかしながら、多くの研究者 (例えば、Ellgring, 1997) は、その範囲を、指、手、腕の動きに限定している。本論文においては、ジェスチャーを「意図的、無意図的に感情や意味を伝達しようとして言語活動中に行われる指、手、腕の動き」と定義する。

次に、バイリンガルを定義する。バイリンガルの定義については、一般に「2 言語話者」として認識され、定着している。*Oxford Encyclopedic English Dictionary* (1991) は、「2 カ国語を流暢に話すことができる者」(141 頁、筆者訳) と定義している。ここで問題となるのは、「流暢」とい

う部分である。山本(1991)は、バイリンガルの定義を整理し、そこに言語能力のレベルによって狭義のものから広義のものまでが存在することを指摘した上で、言語能力の面からバイリンガルを定義することは困難であるとしている。また、『現代言語学辞典』(1988) においても、「二つの言語を使用する能力がどの程度あれば、二言語併用者と呼ぶかについては、明確な解答は得られない」(64 頁) と説明している。クリストファセン(1973)も、同様にバイリンガルを能力の面から定義することの難しさを指摘し、能力とは異なる面からの定義を試みている。林(1992)は、バイリンガルを「日常、二言語に接しているか、または、かつてその状態を経験したもので、二言語をそれぞれの統語構造に従って、主に口語で正しく運用できるもの」(45 頁) と定義している。つまり、バイリンガルを定義する際、ある一定の言語能力レベルと日常的な使用状況の両方を考慮する必要があるということである。本論文の中では、バイリンガルを「2 言語を日常的に使用し、または、かつてそのような状況にあった者で、口語で自らの考えを両言語で容易に伝えることができる者」と定義する。

3-2. 研究方法

研究方法については、Berelson (1952) の内容分析法を採用した。彼は、「内容分析は、コミュニケーションの顕在的な内容を客観的、体系的、量的に描写する調査方法である」(18 頁、筆者訳) と定義している。そして、この方法は、頻度を調査しようとする多くの研究者 (例えば、Thomas, 1994) によって採用されている。本研究の目的は言語活動中に現れるジェスチャーの頻度を 2 言語間で比較することであり、内容分析法が本研究を行う上で最も適していると考えられる。

内容分析を行う際に重要なことは、分析する指標を定めることである (Wimmer & Dominick, 1994)。分析の指標には、Ekman & Friesen (1966) の 5 つの種類——表象記号 (Emblems)、例示子 (Illustrators)、発話調整子 (Regulators)、感情表示 (Affect Displays)、適応子 (Adaptors)——を用いた。しかし、本研究においては言語活動とともに現れるジェスチャーを対象としているため、言語活動とは直接関係のない適応子 (Adaptors) を指標から外した。

3-3. 調査及び分析の手続き

被験者は、先述のバイリンガルの定義に基づき、日本語と英語それぞれを母語にする8名ずつ(男4名、女4名)である。評価基準としては、それぞれの第2言語となる国における滞在期間、各種言語能力検定と現在の職業を参考にして被験者を選出した。日本語を母語とする被験者は、主に過去に海外滞在経験を持っているか、または現在英語を日常的に使用している人々が対象となった。英語を母語とする被験者は、在日の大使館員である。英語を母語にする被験者については協力者との関係からオーストラリア人とした。これは、被験者についてはアメリカ人が本来望ましいが、本研究の趣旨は言語によって差があるかどうかを明らかにするものであるため、オーストラリア人でも問題はないであろうと判断した結果である。

調査は、同日の同じ環境で行うことが望ましいと思われたが、被験者の都合により、異なる日の異なる場所で行った。調査方法は、「今の日本経済を立て直すのに何が最も重要だと思うか」というテーマで、15分間ずつ日本語と英語で議論をしてもらい、その様子をビデオ撮影した。被験者には、事前に調査の目的と方法について説明してあり、了解をとった。また、ジェスチャーの使用頻度は、被験者同士の親密度と会話への参加度によって違いが出ることが指摘されているため (Coker & Burgoon, 1987)、調査に入る前にそれぞれ1時間ほどの時間を設け、打ち解けて話せるように配慮した。

撮影されたビデオの内容は、上記の内容分析法の手続きに従い、2名の訓練を受けた分析者によって分析された。分析結果は、互いに議論、検討された上で一致したものである。分析者間の信頼性は、オーストラリア人が英語で話した場合と日本語で話した場合、日本人が日本語で話した場合と英語で話した場合、それぞれ1.00, .66, .67, .68であり、信頼性は確認された。

4. 分析結果と考察

4-1. 分析結果

それぞれの仮説を検証するために、分析された数値は、日本人が日本語

を話した場合と英語を話した場合のそれぞれのジェスチャーの頻度とオーストラリア人が英語を話した場合と日本語を話した場合のそれぞれのジェスチャーの頻度を表に作成し、χ^2 検定により検定した。

表1は日本人が日本語で話した場合と英語で話した場合に使用したジェスチャーの頻度を表したものである。χ^2 検定の結果、日本語を話している場合と英語を話している場合のジェスチャーの使用頻度には有意な差 ($\chi^2(1, N=8)=25.89$,**$p<.01$) が見られた。つまり、表1が示していることは、日本人のバイリンガルの場合、英語で話したほうがジェスチャーの使用頻度が高くなるということであり、仮説1は支持された。

表 1　日本人の2言語間におけるジェスチャーの使用頻度

	日本語	英　語	合　計
日　本　人	130	226	356

表2はオーストラリア人が日本語で話した場合と英語で話した場合に使用したジェスチャーの頻度を表したものである。χ^2 検定の結果、日本語を話している場合と英語を話している場合のジェスチャーの使用頻度には有意な差 ($\chi^2(1, N=8)=6.87$,**$p<.01$) が見られた。つまり、表2が示していることは、オーストラリア人のバイリンガルの場合、英語で話したほうがジェスチャーの使用頻度が高くなるということであり、仮説2は支持された。

表 2　オーストラリア人の2言語間におけるジェスチャーの使用頻度

	日本語	英　語	合　計
オーストラリア人	113	156	269

4-2. 考　察

これら2つの仮説が支持されたことは、日本語を話す場合よりも英語を話す場合の方がジェスチャーを使用する頻度が高いということである。詳しくは、高コンテキスト文化に属する日本人でも、低コンテキスト文化に

属するオーストラリア人でも、英語を話す場合にはジェスチャーの使用頻度は上昇し、日本語を話す場合にはそれは減少した。したがって、ジェスチャーの出現頻度の差は、「～人」という文化背景で説明できるものではなく、使用言語もその説明変数として考慮しなければならないということが明らかになった。これは、これまで一般的に考えられてきた、「日本人はジェスチャーが少なく、アメリカ人の方がジェスチャーが多い」という通念を否定するものである。本研究の結果から言えることは、ジェスチャーの使用頻度は、文化背景によって影響されるというよりも、むしろ使用している言語によって影響を受けるということである。

これは、ジェスチャーと言語とが密接な関係にあるという多くの研究結果によっても、十分説明できる。McNeil ら (1995) は、ジェスチャーとは「言語ではないが、言語やスピーチの体系の一部であり、（中略）付随するスピーチに内包されるものである」(63 頁、筆者訳) と定義している。つまり、発話量が多ければ、それだけジェスチャーを使用する頻度は高くなり、発話量が少なければ、それだけその使用頻度は低くなるということである。日本語は、発話量を制限してもコミュニケーションできる言語であり、英語は、発話量が少ないとコミュニケーションできない言語であると考えられる。従って、日本語を話す場合にはジェスチャーの頻度は減少し、英語を話す場合には使用頻度が増えるものと考えられる。

この点で、表 1 と表 2 に示されるように、日本人とオーストラリア人の比較において、日本語で話している場合、オーストラリア人の方がジェスチャーの使用頻度が少ないということは興味深い。これは、オーストラリア人にとっての日本語は第 2 言語であり、バイリンガルといえども、発話量が減少したためと考えられる。Sonia ら (1997) は、言語能力的には 2 言語間で違いのないバイリンガルでも、心理的に第 2 言語に対しては能力のなさを感じたり、その言語に対する先入観が働く可能性を指摘している。また、表 1 では、日本人は日本語で話している場合よりも、英語で話した場合の方がジェスチャー使用頻度に大きな差が見られるのに対し、表 2 のオーストラリア人の場合ではそれほどの差は確認されない。つまり、Sonia らの研究に基づけば、オーストラリア人よりも日本人の方が心理的

な作用が大きかったのではないかと考えられる。つまり、バイリンガルが、第2言語における言語能力の欠如に対しどのように対処するかという方法には、1) 言語の使用を制限する、2) ジェスチャーを多用し、言語表現を補うという2つの可能性あるということがこの調査結果から見ることができる。

以上、分析結果を考察した。まず、本研究における仮説は支持され、ジェスチャーの使用頻度に言語自体が影響を及ぼしているということが分かった。次に、バイリンガルが第2言語を使用する場合には、少なくとも心理的な作用が働きジェスチャーの使用頻度に影響を及ぼす可能性を見ることができた。同時にこのことは、ジェスチャーとの関連においては、言語能力には心理的な作用まで含める必要があるのではないかという新しい課題を提起している。最後に、言語能力の欠如に対処しようとする方法には、ジェスチャーを使用しながら積極的に対処するという方法のほかに、言語活動を減少させるという消極的な方法があることも指摘できた。

5. おわりに

本論文は、言語とジェスチャーの関係に注目し、ジェスチャーの使用頻度に影響を与えている要因として言語を仮定した。調査の結果、仮説は支持され、ジェスチャーの頻度は文化によってよりも、使用する言語によって影響されているということが明らかになった。同時にこのことは、ジェスチャーの使用頻度が高くなる外国語を学習する場合、その形態についても教育の必要があることを示唆している。本研究は、ジェスチャーと言語との関係について新しい視点を提供したこと、外国語教育におけるジェスチャー教育の重要性を強化したことの2点において意義があるものと思われる。

本研究において、ジェスチャーの頻度は使用する言語によって影響されているという仮説は支持されたものの、このことを断言するには方法論上の問題が認められる。まず、被験者の問題である。本論文では、バイリンガルの定義を試み、それに該当する被験者で調査を行ったが、言語能力がジェスチャー使用頻度を左右したことは否定できない。特に、日本人が英

語を話した場合において、ジェスチャーの頻度が急増したことはその顕著な例であろう。言語能力の面まで配慮して被験者を募る必要があった。更に、調査を行う前に趣旨の説明を行ったことも、この結果に表れたことは否めない。その他、文化的適応というバイアスについても考慮したいところである。また、被験者数も少なかったため、この結果を一般化することは難しい。更には、英語話者としてはオーストラリア人しか調査していないので、その他の英語話者の場合と英語話者同士の場合等の調査の必要がある。以上のような問題点を踏まえ、今後一般化のために更なる研究が望まれるところである。

今後、ますます外国語教育の重要性が高まるであろう。その時、ジェスチャーを単なる言語の補助的なものとして捉えるのではなく、言語に内包されたものとして教育していくことは重要なことである。同時に、このことはジェスチャーの形態や意味付与の差異に関する研究を促すものでもある。コミュニケーションの方法上の顕在的な差異を、単なる文化の違いとしてではなく、その潜在的な要因に注目した研究が求められるところである。異文化間でのコミュニケーションに関する正しい認識は、異文化に対する理解を深め、より良い関係に導いてくれるものと確信するからである。

参考文献

クリストファセン、P. (1973) 「バイリンガル」松本安弘・松本アイリン訳『外国語の能力開発』(91-130 頁) 日本翻訳家養成センター。

小池生夫 (1976) 「バイリンガリズムの研究」『言語』第 5 巻 10 号、36-43 頁。

田中春美 (1988) 『現代言語学辞典』成美堂。

林　明子 (1992) 「日本語の品詞の認知能力——バイリンガルな海外子女、帰国子女の場合」『言語』第 21 巻 10 号、39-54 頁。

メーレイビアン、A. (1986) 西田　司、津田幸男、岡村輝人、山口常夫訳『非言語コミュニケーション』聖文社。

山本雅代 (1991) 『バイリンガル——二言語使用者』大修館。

Barnouw, D. C. (Ed.). (1989). *International Encyclopedia of Communication* (vol. 2). NY: Oxford University Press.

Berelson, B. (1971). *Content analysis in communication research*. NY: Hafner.

Birdwhistell, R. L. (1973). *Kinesics and context.* Middlesex: Penguin Books.

Coker, D. A. & Burgoon, J. K. (1987). The nature of conversational involvement and nonverbal encoding patterns. *Human Communication Research, 13* (4), 463–494.

Efron, D. (1972). *Gesture, race and culture.* The Hague: Mouton.

Ekman, P. & Friesen, W. (1966). The repertoire of nonverbal behavior: Categories, origins, usage, and coding. *Semiotica, 1*, 221–231. Cited in Knapp (1972).

Ellgring, H. (1997). The study of nonverbal behavior and its applications: State of the art in Europe. In A. Wolfgang (Ed.), *Nonverbal behavior: Perspectives, applications intercultural insights* (pp. 115–138). Göingen: Hogrefe and Huber.

Feyereisen, P. & Lannoy, J. (1991). *Gesture and speech: Psychological investigations.* NY: Cambridge University Press.

Hawkins, J. M. & Allen, R. (1991). *The Oxford Encyclopedic English Dictionary.* NY: Oxford University Press.

Kendon, A. (1997). Did gesture have the happiness to escape the curse at the confusion of babel? In A. Wolfgang (Ed.), *Nonverbal behavior: Perspectives, applications, intercultural insights* (pp. 75–114). Göingen: Hogrefe and Huber.

Kitao, S. K. & Kitao, K. (1994). *Differences in the kinesic codes of Americans and Japanese.* In S. K. Kitao & K. Kitao (Eds.), *Intercultural communication: between Japan and the United States* (pp. 119–138). Tokyo: Eichosha.

Knapp, M. L. (1972). *Nonverbal communication in human interaction.* Holt, Rinehart and Winston.

LaFrance, M. & Mayo, C. (1978). Cultural aspects of nonverbal communication. *International Journal of Intercultural Relations, 2* (1), 71–89.

McNeill, D. & Pedelty, L. L. (1995). Right brain and gesture. In K. Emmorey & J. S. Reilly (Eds.), *Language, gesture, and space.* Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Morris, D., Collet, P., Marsh, P. & O'Shaughnessy, M. (1979). *Gestures: Their origins and distribution.* NY: Stein and Day.

Singelis, T. M. & Brown, W. J. (1995). Culture, self, and collectivist communication: Linking culture to individuals behavior. *Human Communication Research, 21* (3), 354–389.

Sonia, Y. & Stephen, M. R. (1997). A preliminary report on bilinguals—perception of changes in themselves when code-switching. *Journal of Intercultural*

Communication, *1*, 131–144.

Thomas, S. (1994). Artificial study in the analysis of culture: A defense of content analysis in a post modern age. *Communication Research*, *21* (6), 683–697.

Wimmer, D. R. & Dominick, J. R. (1994). *Mass media research: An introduction* (4th ed., pp. 162–186). Belmont, CA: Wadsworth.

Wolfgang, A. & Wolofsky, Z. (1991). The ability of new Canadians to decode gesture generated by Canadians of Anglo-Celtic background. *International Journal of Intercultural Relations*, *15* (1), 47–64.